玄洋社関係史料の紹介

石瀧　豊美

第26回

福岡表警聞懐旧談（一八）

明治丁丑

福岡表警聞懐旧談　下

清漣野生編述

第十三回

○越知彦四郎一列、旧秋月領嘉麻郡椎木村浄円寺に於て捕縛拘引せらる

頓（やが）て越知の一列四名は、彼家の主人が指示せし道筋に従ひ、その夜丑満つる頃、彼家の土蔵を出して、馬見嶽の麓に沿ひ、渓澗の間径を跋渉して、翌四月四日昼時分に、幸にして椎木村に抵（いた）り、八木和一は先づ浄円寺の門を叩きて云々のことを依頼せしに、住持何某は計らずも学友八木が来るを見て、その旧闊の情を温め、慇懃に一行を歓迎なし、庫裏に延（ひ）きて、厚く饗応なし、深更に及ぶ迄酒酌み交はし、酒間徐々として時勢を論じ、一列が安慰を諭す抔、此方に於ては意外の歓待に遭ひて、充分に疲労を療したり。

◇　◇

頓て深更に及びしかば、住持は案内して、奥の一間に寝褥を敷かせ、安眠せられよと挨拶するより、その室に至り見れば、チヤント四人分の絹蒲団さへ敷き列ね、枕頭には燈燭其他、茶具と杯盤迄も奠置なしたり。

依りて上座の寝具には、越知を寝しめ、其他の三人は圍取りして、その褥を定め、各自褥表にて、又々数杯を傾けつつ、熟睡には就きたりけり。

処が、鶏鳴の頃、枕頭には何か呼ぶ声聞ゆと思ひしに、数名の巡査連、室内に闖入して、上意なり、覚悟せよとの呼声なりし。一列は夢乎と計り、打驚き、各褥を排して起身せんとすれば、夢ならで現（うつつ）なり。

各自の頭顱の上に霹靂一発墜雷せしかと疑ひしは、雷ならで、襲入、頭に棒にて打ちなぐりしなり。

越知は枕許に置たる「ピストール」を握りて放発せんとすれば、七、八人の巡査は組附きて之を関（ママ）ふ。

中野・玉ノ井・八木の三名は寝耳に水を注がれ、各水ならで鮮血なり。彼等は棒もて熟睡せし頭部を乱梃せしことを知る。此方へも起身して相手に攫（つか）みかかり、博闘せしも、衆寡敵せず、況や夢中の不意を打たれしことなりせば、各彼等に組臥せられ、脆くも遂に縛に就き□。

上座なる越知は数名の巡査と博闘せしが、声を放つて追手に向ひ、暫時（しば）らく静られよ、事爰に及ぶ、尋常に伏罪すべしとの呼声を洩すと同時に、警部らしき一人が手に提灯を掲げて、その室に入り来り、容を正しくして、一座に向ひ、官命のことなりしには致し方なく、唯今手荒之妄状に及びしは、その勢已（やむ）を得ざるに出でたり。是より、諸君は徐（おもむろ）に支度して、尋常に伏罪あるべしと宥め、衆巡査を制して、鎮静せしめ、茶菓迄も持来りて、其当座を弥縫しつつ、兎角負傷者へは療治し与ふべしとて、二名の医員迄も来りて、一列が各その頭部に負傷して、鮮血に塗れ（し）を洗療して、繃帯を施さしめ、囚駕に召籠め、衆巡査その前後を擁護して、大隈町に向ひ連行せんとす。

中野震太郎は面部を繃帯に巻きながら、意気揚々として、同寺より護送せらるるに臨み、住持に面接して礼謝を表せんと思ひ、庫裏に出でしが、寺内は一人の影だも留めず、僅か炊夫の一老僕あるのみ。察するに、その場の顛末たる、住持は一列を態よく饗応して、一室に安睡せしめ、所在の警吏に密告、爰に及ばせしことと知る。

去れば、中野は彼の老僕に告げらく。住持の居らるるならば、面謁して昨夜来の饗応を拝謝すべきも、不在なれば致方なし。我々は是より十万億土に往生し、何れ閻魔王の庁より報恩いたすべし、と呼びたりけり。此れ四月五日の早朝のことなり。

これより一同は大隈町に護送せられ、暫時らく同町の豪家金光某が裏手の空酒蔵に召込まれ、衆巡査は倉庫の前後を囲繞して、厳敷く監護なしたりき。

その日の昼過に於て、久光忍太郎・船越聞道・松本俊之助の三名も、馬見地方にて縛に就き、巡査隊に擁護せられて、大隈町に出で、同倉庫に召籠められしかば、一同は計らずも、同志に再度邂逅なして、種々の談話を交へしことを知らるべし。

処が四、五名の巡査、倉内に入り来り、自分等は秋月士族なり。聊か諸君に同情を表す。贈別の意を致さんとて、重箱詰の鶏料理と一樽を添へて、当座の犒（ねぎらい）物として、差出す。

去れば、その場の一同は、快々数杯を酌みて、意気揚り、再度囚駕に召籠められ、巡査隊に前後左右を擁護せられ、飯塚宿に出で、それより八木山峠を越へて、その夜、福岡の檻獄舎には繋れたりき。

一列が護せられて、檻舎の内に入るや、左右に衆官吏ありて観目す。前列に立てるは渡辺県令の姿のあるを、一同は囚駕の内より窺ひて過行たりしなり。

又、村上彦十は、馬市の戦争にて重瘡を負ひ、生擒（いけどり）せられ、一時、甘木宿に拘留せられ、加藤堅武も穂波郡大分地方にて縛に就き、相踵で福岡の檻獄舎に送られしも、檻舎を異にし、面語することを得ざりしなり。

越知の一行が住持の歓迎を受け、酒を酌み交わした末に捕らえられた浄円寺＝福岡県嘉穂町椎木

現在の嘉穂町は、果実と歴史で町の振興を図る静かな田園